

Title	ベルクソンにおける意識と身体：『意識の直接与件に関する試論』第1章を中心に
Sub Title	Conscience et corps chez Bergson: focus sur le premier chapitre de l'Essai sur les données immédiates de la conscience
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2012
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.5, (2012.) ,p.63- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20120000-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける意識と身体

『意識の直接与件に関する試論』第1章を中心に

西山晃生

はじめに

本稿の目的は、ベルクソンの処女作である『意識の直接与件に関する試論』（1889、以下『試論』と略す）の第1章において、意識と身体との関係がどのように扱われているかを解明することである。『試論』は決して身体を主題として書かれたものではないが、『試論』における身体の地位へ目を向けることには十分な理由がある。以下、簡単にではあるがその点に触れておこう。

ベルクソンの身体論としてまず想起されるのは『物質と記憶』（1896）における一連の議論であろう。そこでは「外から諸知覚によって知られるだけでなく、内から情緒的諸感覚 *affections* によっても知られる」（MM,11）という点で「私の身体」は他の諸物体から区別される。また、身体は本質的に行動へと差し向けられており、「環境との平衡」（MM,89）を目指すものと規定される。『笑い』（1900）や『道徳と宗教の二源泉』（1932）においては、この「平衡」が社会の形成や維持にかかわる議論へと展開する。われわれの見るところ、意識の諸状態を分析する『試論』第1章の議論は、今述べた二つの点、つまり（1）身体の意識への現れ方が二重であること（2）われわれが自らの身体とともに周囲の状況と渡り合っていくこと、を考慮することなしには理解できない。従って身体をめぐるベルクソンの議論は、処女作である『試論』の冒頭からすでに

始まっていると見るべきである。本稿ではそうした議論の消息を追う。

論述は以下のように進められる。まず第1節で問題の領域を画定した後、ベルクソンが「深層の状態」(DI,15)と呼ぶ心理状態に触れる。第2節と第3節で、より一般的な二つの心理状態について、それぞれ検討する。この順番はベルクソンの記述に沿ったものである。われわれは、意識と身体の関係に関する彼の記述が徐々に深まっていくのを見るだろう。

第1節 心理状態の強度

『試論』第1章の中心を占めるのは、様々な心理状態を分析する作業である。ここでは感情や感覚、筋肉の努力、注意などの強度が問われることになる。これらの状態に強さの差が見て取られるとき、たとえば、「より暑い、より寒い plus ou moins chaud より悲しい、よりうれしい plus ou moins triste」(DI,11)と感じられるとき、われわれは実際には何をしているのか。

「常識」(DI,1)は、こうした心理状態の強さを量ととらえる。この素朴な見方をもう少し洗練させれば「強度量」(DI,2)という概念が成り立つだろう。しかし、まさに心理状態に関するこのような見方のうちにこそ、ベルクソンは錯誤を見出す。その不正確さと粗雑さを彼は告発する。以下、その概略をたどってみよう。

どのようなものであれ、二つの量は計測が可能であるときに初めて比較される。そして、そのためには両者に共通の尺度がなければならず、その尺度の上に両者を重ね合わせることができるのでなければならない。重ね合わせたときに一方が他方を含むことになるだろう。含むほうが大きいもの、あるいはより量が多いものであり、含まれるほうが小さいもの、あるいはより少量のものと呼ばれる。こうして量の差異は包含関係に帰着する。それ以外の仕方では量を規定することはできない。従って、量を持つものは含んだり含まれたりするような外延を持っていなければならない。

しかし、二つの心理状態の間にこうした包含関係を想定することは問題にならない。強い感覚は弱い感覚を含んでいるとでもいうのだろうか。二つの弱い感覚から一つの強い感覚を合成したり、一つの強い感覚を二つの弱い感覚に分割することなど、とても考えられないだろう。むしろ、それぞれの感覚は独特の質と「ニュアンス」(DI,19)、「鋭さ」(DI,22)を持っているというべきだ。

こうした質としての心理状態のうちに量の差異を見出そうとすると、「悪循環」(DI,2)「矛盾」(DI,3)に陥る。その場合、外延を持たない質の大きさを比べなければならないのだが、大きさというもの自体が外延的だからである。「漠然とした直観」(DI,3)によって質と量をなんとなく同じようなものとみなすため、このような錯誤が生じるとベルクソンは言う。『試論』の最初の一步は、質と量とをそれぞれ純化した形で取り出し、こうした不正確さを糾すことであつた。

しかし、問題はむしろここから始まる。われわれはなぜ、これほど安易な形で錯誤に陥るのか。なぜ、それと気づかぬまま「強度的なものを外延的なものに翻訳して」(DI,3)しまうのだろうか。

ベルクソンの記述に従う限り、彼が錯誤と呼ぶものを生み出す仕組みには、身体のあり方が深く関わっていると考えざるを得ない、というのが本稿の立場である。『試論』第1章で示された感情や感覚のうちに、われわれはベルクソンの最初の身体論を見出す。しかし、その前に予備的な考察をしておかなければならない。議論が『試論』で扱われる範囲を超えて広がりすぎないように、領域を限定しておく必要がある。

量の観念をもたらす外延的なものとして考えられるのは、典型的には物体である。ベルクソンが心理状態の「外的原因」という語を用いるとき、指示されているのは物理的な対象に他ならない。そして、そのような「外的原因」に依存せず、諸要素が溶け合った形で一つになり、「それ自身で自足している」(DI,6)心理状態のことを、彼は「純粹に内的な諸状態」(DI,1)と呼ぶ。しかし、こうした内／外という語をそれぞれ精神と物質

(あるいは身体) に結びつけるという誘惑に従ってはならない。『試論』第1章で意識の諸状態が扱われているといっても、そこでは心身関係や物質と精神の関係といった形而上学的なテーマは避けられているからである。この点に関して、『講義録』に伝えられる言葉を参照しよう。『試論』と近い時期になされた心理学に関する講義で、彼は以下のように述べたとされる。

われわれは、なぜ、また、いかにして魂は身体に影響を与えうるのかという問題と取り組むつもりはない。これは「形而上学」の問いであって、あらかじめ精神と物質の正確な定義を探求した上でなければ、これを深めることはできない。(C I, 271) ⁽¹⁾

『試論』、とりわけその第1章はこの意味で明確に心理学的な探求である。そこでは意識の具体的なあり方だけが検討される(講義で言及された形而上学的な取り組みは『物質と記憶』においてなされる)。従って、意識を他のものへと還元することによって問題の解決を図ろうとする試みは、まず最初に退けられなければならない。具体的には、意識状態を大脳皮質の分子運動と関連づけ、前者の強度を後者の振動や複雑さの尺度としてとらえる立場が一蹴される。

[こうした仮説が問題を解決しないのは] ある感覚の強度がわれわれの身体組織のうちでなされる仕事の多寡を証明することはありうるが、しかし意識によってわれわれに与えられているのは感覚であり、この機械的な仕事ではないからである。(DI,5)

意識の状態が身体(とりわけ脳)の状態に対応するというものをベルクソンは決して否定しない。しかし、両者が対応するというのと、前者の意味合いが後者によって完全に評価されるということとは決定的に異なる

る。脳の状態として理解された意識はもはや意識ではない。ベルクソンにとって、こうした試みは、科学的に誤っているのではない。意識の意識としてのあり方をどう理解するかということが問題になっている場面では、単に場違いなのである。

従って、ベルクソンが「純粋に内的な諸状態」を記述するときにも、あらゆる物理状態から独立した実体としての靈魂のようなものが実際に想定されているわけではない。また、諸状態が本当に「外的原因」とまったく無関係であるか、ということも追求されない。ただ、物理的な兆候をまったく示さず、量とは無縁なものとして意識に現れればそれで十分である。たとえば、以下のような言い回しに注目してみよう。

しかし、ある種の魂の状態は、真偽はともかくとして、それ自体で自足しているようにわれわれには見える。深い喜びや悲しみ、反省された情念、美的情動などがこれに当たる。いかなる外延的要素も介入していないように見えるこれらの単純な事例において、純粋な強度はよりたやすく定義されるに違いない。(DI,6、強調は引用者)

「純粋な強度」をめぐるベルクソンの記述、たとえば喜びが「われわれの意識状態の未来へ向けての方位づけ」(DI,8)から始まり、「われわれの観念と感覚がより速く継起する」(DI,8)段階を経て「自身を反省して、存在することへの驚きのようなものを覚える」(DI,8)ことへ至るまでの質的な進展に関する記述はなるほど鮮やかなものであるが、あまりにも独特であるため評価しづらい。だが、こうした記述を受け入れられるがどうかは、さしあたりわれわれにとって重要ではない。彼が質というものを純化された形で取り出す必要に迫られていたということは少なくとも理解できるからである。ここでは二つのことに着目しておきたい。

第一に、内的なものと外的なものが単純な仕方で、つまり境を接するようなものとして比較されているわけではないということである。意識

のうちで、不可分な形で一つの質を形成する状態と、並置された諸要素に分解されうる状態とがここでは対比されている。両者は諸要素の判明さに応じて連続的に変化し、深さを示す語によって表現される。こうして、「内的」「外的」という対比に「深層」「表層」という対比が重ねあわされる。

第二に「純粋に内的な状態」は例外的であると、ベルクソン自身が認めていることである。

われわれがそれらに基づいて強度というものを定義したばかりの心理的諸状態は深層の状態であり、外的な原因と連帯しているようにはまったく見えないし、筋肉収縮についての知覚を含んでいるようにも見えない。しかし、これらの状態はまれである。情念や欲望や喜びや悲しみで、肉体的な兆候を伴わないものはほとんどない。(DI,15、強調は引用者)

「深層の状態」がまれであるということは、われわれの意識はほとんどの場合、多かれ少なかれ表層的な状態にあるということだ。諸要素は程度の差こそあれ区別され、量や大きさの比較を受け入れる。ここで身体が重要な役割を果たすということは引用箇所からも予想されるだろう（「筋肉収縮についての知覚」を含んでいない意識状態は「まれである」というのだから）。

今やわれわれは『試論』第1章における身体に関する問いを絞り込むことができる。ここまでの議論を簡単にまとめておこう。1 ベルクソンは「強度量」という概念を批判した。2 意識状態の強度は純粋な形では質的な進展として定義される。3 だが、純粋な質というものはめったに意識に現れない。4 従って、意識はほとんどの場合、少なくとも部分的には量として現れるものを強度として受け入れているのだが、そうした量の表象に身体が寄与している。5 身体の物理的ありかたより、その意識への現れと

いうものが問題とされる。

次節ではベルクソンが「表層的状态」の極として (DI,15)、つまり意識が量の表象を受け入れる典型的なケースとして取り上げる筋肉努力についての記述から、意識と身体との関係について更なる含意を引き出してみよう。

第2節 意識における身体の役割 (1) 筋肉の努力

筋肉の努力は量や大きさという形で直接意識へ現れるように見える、とベルクソンは言う (DI,15)。しかし、彼の議論はそれが錯誤であることを示し、またそうした錯誤が生じる由来を示す。挙げられる具体例は数多くあるが、一つで議論の全体をカバーするものはないので、ここでは二つ引用しておこう。

唇を次第に強く噤むとき、諸君はこの場所で同じ一つの感覚が次第に強くなっていくのを感じ取ると信じる。さらに反省してみれば、ここでもまた、この感覚は同一のものにとどまっているのに顔と頭の筋肉のいくつか、ついで身体の残りの部分の筋肉すべてがこの操作に加わっていたことに諸君は気づく。諸君はこの全身的な侵食、この面積の増大を感じたのであり、それはまさに量の変化である。しかし、何よりも噤んだ唇のことを考えていたため、諸君はこうした増大をこの箇所〔唇〕へと局所化し、そこで費やされた心理的な力を、それが延長を持たないにもかかわらず、ある一つの大きさにしてしまったのである。(DI18-9)

ある人物が少しずつ重さを増していく錘を持ち上げる場面を注意深く検討してみたまえ。筋肉の収縮は次第に彼の全身を覆うようになる。(略) 重さの感覚は、ある瞬間に疲労に変わり、疲労は苦痛へと変わ

っていく。ところが被験者は、心理的な力が腕に押し寄せて連続的に増大していくのを意識したと思い込むだろう。指摘されないかぎり、被験者は自らの誤りを認めないだろう。(DI,19)

われわれは、ここに記述された一連の過程が、ベルクソンの立場から見た場合三つの錯誤から成り立っていることを指摘しよう。以下、引用した箇所を補いながら確認していこう。

運動が生じないときには努力感覚が消え去る (DI,17) ということからわかるように、われわれが自分の身体を動かそうとするとき、実際に意識しているのはそうした意志の努力であるというより、随伴する運動の感覚である。この感覚は、運動に関わる身体の一部が占める面積によって測られる量である（「諸君はこの全身的な侵食、この面積の増大を感じたのであり、それはまさに量の変化である」）とともに、変化し続ける質でもある（「重さの感覚はある瞬間に疲労に変わり、疲労は苦痛へと変わっていく」）。

しかし、われわれは自分が動かそうとしている箇所のことだけを考えているので、努力がこの一箇所にのみ集中すると信じている。（「何よりも唇のことを考えていたため、…」）。そのため、われわれは「指摘されないかぎり」自らが随伴運動を意識しているということに気づかない (DI,18)。

ところで、質的な変化が複合的なものである (DI,20) のに対して量的な変化は単純である。われわれは単純な諸事物を好む (DI,10) ため、運動の意識は量に関わると信じ込む。これが第一の錯誤である。

取り出された量は、実際には運動に関わっている部分の面積を示しているにもかかわらず、われわれはそれを局所化された身体の一箇所に割り当ててしまう。そのため、身体の一部で同じ感覚が徐々に増大していくと信じ込む（「諸君はこうした増大をこの箇所へ局所化し…」）。これが第二の錯誤である。

そして、空間のうちで展開する運動に先立って、それを引き起こす心

理的な力、あるいは「非物質的な努力」(DI,21)が、「いわば圧縮された状態で」(DI,16)大ききとして意識されていると信じ込む。これが第三の錯誤である。

こうして、「われわれは純粹に心理的な諸状態が、空間を占めないにもかかわらず大ききを持つということを理解したと信じ込む」(DI,16、強調は引用者)。強調箇所からわかるように、誤っているのは意識ではなく、意識についての理解であり、信念である。この理解は意識を極めて貧しいものにしてしまう。つまり、身体意識から質を捨象し、量としての身体意識から広がりをも捨象し、さらには身体意識そのものを意識から捨象してしまうためである。

ベルクソンは、この理解によって切り捨てられてしまった部分を意識に回復させる。すると以下のような結論が得られる。

筋肉の努力の増大に関するわれわれの意識は、末梢感覚の数の増加と、それらのいくつかの間で生じる質的な変化についての二重の覚知に還元される。(DI,19、強調は引用者)

さて、われわれはここからベルクソンにおける意識と身体の関係についていくつかの見通しを立てることができる。身体はわれわれに対して二つの異なった現れ方をする。一方では質的に進展する運動として。他方では外延を有し、量としてとらえられるものとして。運動が自らのものとして直接意識されるのに対し、外延は空間を媒介にして知られる。

何か二つのものが実体的に区別されるのではない。意識に現れるのは同じ一つの身体である。だが、二つの現れ方は決して一致せず、また一方が他方に還元されることもない(還元されるのなら、質と量の取り違いが問題になることもないだろう)。(2)

筋肉に関するこうした意識状態は、外的な原因の表象が入り込まない「深層の状態」(DI,15)としての深い感情とは対極にある「表層的な努力」

(DI,19) と呼ばれる。しかし、既に確認したように、身体的兆候を欠いた「深層の状態」は例外扱いされている。つまり、ベルクソンにおいてわれわれの心理状態はその大半が程度の差こそあれ表層的であり、したがって身体に関する二重の意識を含んでいることになる。

大多数 un grand nombre の心理的諸状態は、筋肉の収縮と末梢感覚を伴っている。(DI,20)

筋肉の努力感覚のような表層の心理状態と深い感情のような深層の状態との間には無数の「中間的諸状態」(DI,20)があるとされる。これらの諸状態のうちには、それに対応する身体のあり方が多少なりとも入り込んでおり、したがってそれらは筋肉の努力と同じ仕方でも分析される。それは、「知的な努力、あるいは注意」(DI,20)と「激しい aigu 欲望、とてつもない怒り、情熱的な愛、激烈な憎悪」(DI,21)のような、一見すると正反対であるような心理状態においても変わらない。

われわれは、これらの状態の各々は、ある一つの観念—注意においては多かれ少なかれ反省された認識観念であり、情動においては反省されざる行動観念である—によって秩序付けられた筋肉収縮の系に還元されるだろうと考える。したがって、これらの激しい情動の強度は、それらに随伴する筋肉の緊張以外のものではないはずがない (DI21)

こうしてわれわれはベルクソンにおいて意識と身体との間に緊密な形で結びつきが想定されているのを見る。ただし、既に注意したように、心身関係のような形而上学的な水準においてなされているのではない。それとして気づかれるかどうかは別として、われわれは常に身体を意識しているという意味である。

いまや、強度を量として理解してしまうのはなぜか、という最初の問

題にある程度の見通しを立てることができる。第一に、われわれは絶えず身体を意識している。第二に、身体は常に質と量という二つの形で同時に意識へと現れる。第三に、質よりも単純な量のほうがとらえやすい。これらのことを考え合わせるならば、われわれが身体とともに生きるというまさにそのこと自体が質と量との混同をもたらす、あるいは少なくとも見積もってもその大きな原因の一つである、ということになるだろう。

さて、これまでに見てきた感情や努力は複合的なものであった (DI,23)。そこには諸要素が判明ならざる仕方で浸透しており、心理状態の強度というものはそれら諸要素の数の大小によって評価される (DI,6,23)。心理状態の形成に寄与する (身体の、あるいは意識の) 部分が多ければ多いほど、感情は強く、情動は激しい性質のものになっていく。大きさや量によって測られるものとは違う質的な強度とはこのようなものにほかならない。

これまでの説明が意識状態全般に関して有効であるためには、意識に「単純状態」として現れるように見えるもの、たとえば様々な感覚 (DI,23-4) についても同じことが言えるのでなければならない。次節でわれわれは彼が「情緒的感覚sensation affective」(DI,24) と呼ぶものについて分析し、身体と意識との関係について決定的ともいえる議論を取り出したい。(3)

第3節 意識における身体の役割 (2) 情緒的感覚

痛みや快樂のような「情緒的感覚」のうちに大きさの観念が侵入する仕組みを説明するのは難しい、とベルクソンは言う (DI23-4)。それは、われわれがそうした感覚を神経的振動の意識面への表現や反響とみなし、それ以外のものを見ようとしないうためである。ここで示される難点は二つに分節できる。

前節の終わりで確認したように、質的なものである心理状態が量を持ったものとして理解されるのは、質と量が相互に還元不可能な形で、かつ

同時に意識へと現れるからであった。筋肉の努力の場合は「反省すれば」(DI,19) こうした関係を理解することができると思われた。しかし、もし感覚が物理的振動の表現や反響に過ぎないのであれば、このような意識のうちでの二元性は決して成り立たない。振動はどのような仕方であれ、振動のままでは意識に入り込むことはできないだろう。意識というあり方と根本的に相容れないからである。

そして、もしもそれ〔感覚〕が分子運動の意識的な翻訳であるとするならば、その分子運動からは何も保持しないだろう。というのも、まさにこの運動が快楽や苦痛の感覚に翻訳されるからこそ、運動は分子運動であるかぎり無意識なものにとどまるからである。(DI,24)

第1節で言及した意識状態の根本性に関する議論が繰り返される。意識を意識以外のものに還元する試みは、少なくともベルクソンの立場からは意味を成さない。これが第一の難点である。ここでもまた、意識の意識としてのあり方が問題となる。

第二に、振動の表現や反響とみなされた感覚は「単に有機体のうちで今まさに生じたことや現に生じていることを表現する」(DI,25)ものになってしまう。このとき、痛みや快楽の耐え難さのような切迫した感じを理解することができない。

従って、感覚を固有の心理状態として理解するためには、身体についての意識のあり方を解釈し直す必要がある。ここでベルクソンが踏み出す一歩は決定的に重要である。

快楽や苦痛がいくつかの特権的なもの〔生物〕において生じるのは、ほぼ間違いなく反応が自動的に生じてしまうことに対する抵抗を、これらの生物が自ら許可するためである。感覚には存在理由がないか、あるいは感覚は自由の始まりであるかのいずれかである。しかし、準

備されつつある反応の本性を何らかの明確なしるしによってわれわれに知らせるのでなければ、感覚はどのようにして、こうした反応に抵抗することをわれわれに許すというのだろうか。そして、このしるしは、得られた感覚のただなかで未来の自動的な運動を素描し、あらかじめ形成するようなことでなければ、いったい何であるというのか。従って、情緒的な状態とはすでにあった身体的な振動、運動、現象のみ対応するのでなく、むしろ準備されつつあり、これから存在しようとしている振動、運動、現象にこそ対応するものでなければならない (DI25)。

整理しよう。われわれは身体が自動機械であるという側面を否定することができない。他の動物とは差があるものの、人間の身体も刺激に対してある程度はひとりでに反応する。人間（と一部の高等動物）に特徴的であるのは、刺激へのこうした自動的な反応がそれと気づかれないまま生じるのではない、ということだ。人間は自動性へ抵抗する運動の感覚という形で当の自動性そのものを知るだろう。情緒的な感覚とはそのようなものに他ならない。したがって、その本質は意識的運動であるという点で筋肉努力と同じである。たとえば、苦痛の強度は「意識に認められながら *au vu et su de la conscience* 苦痛に共感し、その苦痛に反応する身体部位の数と延長によって」(DI,27) 定義される。また、「快樂の鋭さそのものは、それが味わわれている間は、快樂におぼれて他のあらゆる感覚を拒む有機体の惰性に他ならない」(DI,28-9)。

さて、ここまでで情緒的感覚に関してベルクソンが最初に提起した問題は解決されたはずだ。情緒的感覚は分子の振動を翻訳したものでなければ受動的なものでもない。ここでもまた身体の意識的運動が質と量の両方をもたらすということによって説明がつく。しかし、ベルクソンは意識の役割に関してもう一歩進める。

逆説的にも、この情緒的感覚はわれわれが自動的に反応しつつあると

いうことを示すというまさにそのことによって、われわれに選択を促し、われわれの自由の必要条件を形成する。ここでは、意識は単に一つの不可分な全体であるだけではない。それは未来に向かっており、そのことにこそ自由の端緒がある。

なぜ未来への示唆が意識に与えられるのかという問いは検討の対象にならない。ここでベルクソンが持ち出すのは、晩年に至るまで彼を導く原理のひとつであり続ける、自然の功利性である。⁽⁴⁾

実際のところ、これほど根深く功利的なものである自然が、もはやわれわれに属さない過去や現在についてわれわれに知らせるというまったく科学的な役目を意識に割り当てたということにはほとんど真実味がないように思われる (DI25)

この場面でベルクソンは進化に言及していないが、当然念頭には置かれているだろう。なぜ人間を含む一部の高等生物だけが痛みや快楽の感覚を持つのか、という問いは、なぜそれらの生物において、刺激に対する反応だけが与えられるのでなく、ただ生きるためには必要のない感覚が付け加えられたのか、という問いに帰着する。その問いにはこう答えられるだろう。刺激から反応への過程を意識するということは、自らが状況のうちにいると知ることであり、またその状況のうちでふるまう仕方を選択している（少なくともそのきっかけを得ている）ということである。感覚の存在はこうした生の高度さを示している、と。

われわれの人格はこうした状況におけるふるまいのうちにしかない。そのような見方へ導く箇所を最後に引用しておこう。

われわれは逆に、ある感覚がわれわれの側に喚起する自動的反応の抗しがたい運動、あるいはその感覚がわれわれに刻みつける無力さに、極めつけの強度を持った感覚を認める。耳元で放たれた大砲の一撃

〔の音〕や、突如灯されたまぶしい光は、われわれから一瞬の間人格の意識を取り去ってしまう。(DI30、強調は引用者)

突如として与えられる強い刺激は、われわれと状況との関係を断ち切ってしまう。自動的な反作用が有無を言わさぬような仕方では生じ、自らの選択によって反応することができないとき、われわれの意識はすっかり占領されてしまう。「人格の意識を取り去ってしまう」ということの内実がこのようなものであるならば、ここで示されているのは、われわれの人格は身体を介して状況と適切な仕方ではかかわりあうことにおいてあるということである。

結論

ベルクソンが終始問題にしていたのは、意識をどのように理解すべきかということだった。意識を他のものへと還元することに対して彼が常に批判的であったのは、そのような見方が意識と生との本質的な関係を見失わせ、われわれが意識を持つ理由を隠してしまうからだ。意識は偶然与えられるのではない。それは、状況のうちで、かつ状況に飲み込まれずに未来に向かって生きるためにこそある。われわれの生は、身体がまったく介入しない「ように見える」深層の感情と、(直前に引用した例のように)自らとの親密さを欠いたものとして現れる身体にひたすら圧迫される状態との間に広がる無限の中間地点で営まれる。こうした中間的諸状態、意識が物事を質と量という二重の形で理解する諸状態それ自体が身体によって準備されることは間違いない。そのような意味で、意識のあり方に対する身体の寄与は決定的なものである。

『試論』の中で、あるいはベルクソン哲学全体において最も重要な概念である「持続」は第2章ではじめて登場する。質と量を峻別し、両者の混同を批判する第1章の議論から第2章以降の展開が導き出されることは確

かなのだが、第2章冒頭の数に関する議論から出発して（つまり第1章を前提とせず）も「持続」についてさしあたり理解することは可能である。そのような事情もあつてか、今日『試論』の第1章が注目されることは比較的少ない。

本稿では、本質的には区別されるはずの質と量が事実上はほとんど常に相伴って現れる理由を意識と身体との関係に求めた。バルクソンの身体論を扱うためには、まずここから始めなければならない。意識と身体との関係とは、われわれに対する身体の与えられ方そのものであり、身体のあり方とは、ある物体が人称を伴った行動の器官として存在する仕方そのものだからである。『物質と記憶』以降の身体論はこうしてすでに素描されていたことになる。

(にしやま・てるお 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

* バルクソンからの引用は書名を以下の略号で示し、その後に現在出版されている単行本のページ数を付す。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889 (2007)

MM: *Matière et mémoire*, 1896 (2008)

DS: *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932 (2008)

CI: *Cours I Leçons de psychologie et de métaphysique*, 1990

- (1) 『講義録』が受講者のノートに基づいたものであり、バルクソン本人の校閲を経していないということを、念のため記しておく。
- (2) ただし、不連続的に「ある瞬間」新しいものが現れるという質的变化のあり方に関する記述や、質と量との理念的区別に関しては議論の余地がある。ドゥルーズが以下のようにバルクソンを批判するとき、彼が念頭においていたのはこれらの点であったと思われる。

(…)強度に関するバルクソンの批判は説得力を欠くように思われる。それは完全に出来上がった質と既に構成された延長とを自らに与えてしまうのである。(Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, PUF, 1968, p.308)

なお、この点に関して以下を参照した。Caroline Guendouz, Pradine, critique de Bergson. Une réinterprétation de la loi de Weber, in Frédéric Worms (éd), *Annales bergsoniennes* 3, PUF, 2007, pp.407-16.

- (3) なお、ベルクソンは「情緒的諸感覚」と「表象的諸感覚」とをさしあたり区別した上で、後者においては外的な「原因の量を結果の質のうちに置く」(DI,31) ことによって強度が量として理解される、という議論を展開しているが、本稿では扱わない。身体との関係については情緒的感覚のほうが本質的だと考えるからである。また、両者は実際には多くの場合相伴って現れるとされる。

今度は、表象的感覚の多くが情緒的な性格を持つということ、従ってわれわれの側からの反応を引き起こすということ、表象的感覚の強度を評価するときにわれわれがこの反応を考慮に入れること、に注目してみよう。(DI,29)

- (4) たとえば、晩年の『道徳と宗教の二源泉』に次のような記述がある。

(…) 自然が功利的であること、そして機能を持たない本能など存在しないことを忘れてはならない。(DS,168)

自然が功利的 *utilitaire* であるという見方は、身体、そして意識をも生に対する有用性 *utilitarité* という視点からとらえるようわれわれを導く。Montebello は、直接的経験を大きさや数に翻訳してしまう錯覚の源泉をこの有用性に見て取る。

Pierre Montebello, *L'Autre métaphysique*, Desclée de Brouwer, 2003, pp.241-3